

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

9月15日、奈良市漢國^{ハニワ}町の漢國神社で「節用集祭り」が行われた。今年で41回目という。節用集とは室町時代に刊行された国語辞書である。

南北朝期に中国に渡った建仁寺の僧龍山徳見に従つて日本に来た宋人林淨因^{ジンイン}が、わが国に初めて饅頭の製法を伝えたといふ。中国の饅頭は、野菜や肉を小麦粉で包んで蒸したものだが、中に小豆の餡を入れたものが「奈良饅頭」として珍重された。

その子孫の林宗一(1498~1581)は町人ながら学問を好み、饅頭屋の傍ら辞書を編さんし、それが「饅頭屋本節用集」と呼ばれた。中国の食べ物を日本で改良して先端の菓子を作った家系が、国語辞書をも作ったわけだ。林淨因を祀る林神社が漢國神社本殿の右手にあり、4月19日には菓子業者を中心に行なわれた。林神社頭彰祭として、この祭りが9月15日には林神社頭彰祭として、この祭りが行なわれている。社前には林家の子孫の内、東京の塩瀬総本家から紅白の饅頭が供えられ、右手の案に、献じられた書籍が並べられている。社殿の柱には「文運興隆」と墨書きされた行燈も掲げ

菓子と本の興隆願う

午前11時祭典開始。暑さの残る境内には、草むらから虫の音が響いてく

近年、「人文学」を軽視する政策が進められて



祭典後、あいさつをする梅木富司

—奈良市の林神社前で、筆者提供

る。参考者は、地元氏子の関係者、さらに教育文化関係者など、梅木春興宮司の幅広い交流を反映して多彩な人々が集まつた。終わると、太田登大理大名誉教授が「奈良をめぐる近代歌人」と題して、会津八一と前川佐美雄の大和の歌について講演し、その後直会。その冒頭で、塩瀬総本家の川島一世氏は和菓子店の減少を憂いながらも、本物の味を残したいとあいさつした。

近年、「人文学」を軽視する政策が進められておりがあるのだと思う。(奈良民俗文化研究所代表)

表